

N A K A
那 珂 37

- 那珂遺跡群第66次調査報告 -

2005

福岡市教育委員会

序

福岡市は原始より大陸文化流入の門戸として栄え、市内に多くの埋蔵文化財が残っています。このため、まちづくりの目標のひとつに「海と歴史を抱いた文化の都市」を掲げ、実現を目指しております。

今回報告いたします那珂遺跡群も、博多駅の南に位置する比恵・那珂台地に立地する市内有数の遺跡群ですが、都心部に近いために開発が盛んに行われております。このため、各種開発などでやむなく消滅する遺跡につきましては工事に先立って発掘調査を行い、記録保存に努めております。

今後、本書および調査資料が学術研究だけにとどまらず、市民各位の埋蔵文化財に対する認識を深めるために寄与することを深く願うものです。

最後になりましたが、発掘調査にあたり全面的にご協力いただいた地権者の皆様をはじめ、御支援と御指導をいただいた関係各位に対し深く感謝いたします。

平成17年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 植木とみ子

本文目次

第Ⅰ章	はじめに	1
1.	発掘調査に至る経緯	1
2.	調査の組織	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境		2
1.	遺跡の立地	2
2.	遺跡の歴史的環境	2
第Ⅲ章 調査の記録		4
1.	試掘調査の概要	4
2.	調査の概要	4
3.	遺構	5
4.	遺物	8
第Ⅳ章 小結		11

挿図目次

Fig.1 調査地位置図 (1/200,000)	1
Fig.2 調査地および既調査地位置図 (1/5,000)	2
Fig.3 調査地周辺遺跡分布図 (1/30,000)	3
Fig.4 調査地位置図 (1/500)	4
Fig.5 遺構配置図 (1/50)	6
Fig.6 穴住居跡SC10出土土器実測図 (1/3)	9
Fig.7 溝SD18出土土器実測図 (1/3)	9
Fig.8 溝SD34出土土器実測図 (1/3)	9
Fig.9 溝SD35出土土器実測図 (1/3・1/4)	10
Fig.10 小穴・包含層出土土器実測図 (1/2・1/3)	10

図版目次

PL.1 調査地周辺航空写真 1948年(昭和23年)撮影	
PL.2 調査地周辺航空写真 1975年(昭和50年)撮影	
PL.3 調査地周辺航空写真 1993年(平成5年)撮影	
PL.4 調査地周辺航空写真 2001年(平成13年)撮影	
PL.5 (1) 第I調査区全景(北から)	
(2) 第II調査区全景(北から)	
PL.6 (1) 第I調査区穴住居跡SC10全景(北から)	
(2) 第I調査区穴住居跡SC10全景(東から)	
PL.7 (1) 第II調査区穴住居跡SC10全景(北西から)	
(2) 第II調査区穴住居跡SC10南壁溝(北西から)	
PL.8 (1) 第I調査区溝SD17・18(南東から)	
(2) 第I調査区溝SD17・18(北西から)	
PL.9 穴住居跡・溝出土遺物	
PL.10 溝・土坑出土遺物	

凡　例

- 本書は福岡市教育委員会が福岡市博多区東光寺一丁目263-2 地内の個人専用住宅建設工事予定地内において、1998年度(平成10年度)に実施した那珂遺跡群第66次調査の発掘調査報告書である。
- 本書における調査の細目は次のとおりである。
- 遺構実測図に付した座標値は平面直角座標形第II座標系(日本測地系)による座標値である。方位は磁北で、真北に対して6°18'西偏する。
- 本書では遺構ごとに一連の遺構番号を付け、番号の前にSC(穴住居)、SD(溝)、SK(土壙)、SX(その他)などの遺構の性格を示す分類記号を付した。
- 本書の遺構遺物の撮影および遺構の実測は灌本正志、遺物の実測は柳原俊行、灌本、トレースは末次由紀恵がおこなった。
- 本書の執筆・編集は灌本正志が担当し、編集作業において中間千衣子の協力を受けた。
- 発掘調査に係る遺物・記録類のすべては、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵されている。

遺跡名	調査次数	調査番号	遺跡略号	調査地	面積	調査期間
那珂遺跡	66次	9818	NAK-66	博多区東光寺町一丁目17-1	80m ²	1998.6.8 - 1998.6.25

第Ⅰ章 はじめに

1. 発掘調査に至る経緯

1998年（平成10年）4月23日、土地所有者の崎山幸義氏より福岡市教育委員会へ福岡市博多区東光寺町一丁目17-1地内における埋蔵文化財事前審査願いが提出された。

当該地域は那珂・比恵低丘陵の北東縁部に位置し、埋蔵文化財包蔵地域の「那珂遺跡」として登録されている地域であった。また、周辺における発掘調査地では弥生時代～奈良時代の遺構・遺物が発見されており、当該地域においても遺跡の存在が十分に推定された。さらに、埋蔵文化財課では試掘調査を1998年5月19日に行った結果、遺構は地表下56cmの鳥栖ローム層面で溝2条および竪穴住居跡、遺物は溝から須恵器甕の破片、住居跡からは土師器小片がそれぞれ出土した。このため、当該地においては古墳時代～奈良時代の遺跡の存在が推定され、計画されている開発事業が実施された場合には遺跡に影響が出ることが確実となった。

これらの試掘調査結果を依頼者に回答するとともに、文化財の取り扱いについて協議を行った結果、建設工事に先立って埋蔵文化財発掘調査を実施することとなった。調査は調査原因が個人専用住宅建設であることから国庫補助事業とし、発掘調査は平成10年度、資料整理は平成16年度に実施した。

2. 調査の組織

(1) 調査主体 福岡市教育委員会

【平成10年度調査時】

教育長	町田英俊
文化財部長	平塚克則
埋蔵文化財課長	荒巣輝勝
調査第2係長	山口讓治
調査・整理担当	灌本正志

【平成16年度整理時】

植木とみ子
山崎純男
山口讓治
池崎讓二
灌本正志(埋蔵文化財センター)

(調査整理補助)

上野裕子 末次由紀恵 長浦芙美子 中間千衣子 中村智子 持原良子 山野祥子 椎原俊行



Fig.1 調査位置図 (1/200,000)

第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の立地

那珂遺跡の立地する丘陵は背振山系から派生して島状に高低を繰り返しながらのびる春日・那珂・比恵の各丘陵の先端部に近く、東側を御笠川、西側を那珂川で囲まれる。洪積地の丘陵は複雑に入り込んだ谷部により八手状を呈する。丘陵の標高は平坦部で6~8m、谷部で2~3mが推定される。現在の海岸線からは4kmを測るが、当時としては数百m程度と推定される。調査地は丘陵の東縁部に位置し、遺構検出における標高最高点は7.86m、最低点は6.74mを測る。

2. 遺跡の歴史的環境

これまでの発掘調査で、調査地の東側を南北にのびる御笠川と月隈・平尾丘陵や東側を春日市から博多駅南側近くまで島状に高低を繰り返しながらのびる春日・那珂・比恵の各丘陵においては原始からの人々の暮らしの跡である遺跡が数多く存在していることが明らかとなっている。また、最近の発掘調査成果により、これまで遺跡の存在が想定されていたなかった御笠川と月隈・平尾丘陵との間に位置する福岡空港などの低地においても遺跡が数多く発見され、微高地を中心とした底地において広範囲に遺跡が存在することが判明した。これまで弥生時代の集落は板付遺跡に代表される低丘陵上とその周辺から始まり、低湿地の開発はそれ以降とされてきたが、弥生時代の早い段階から微高地を中心とした底地において人々が生活を営んでいたことが明らかになりつつある。

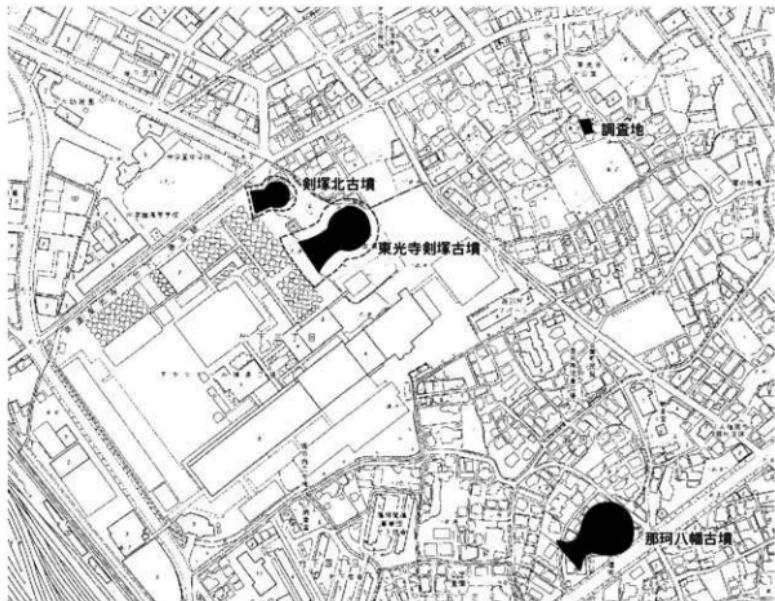
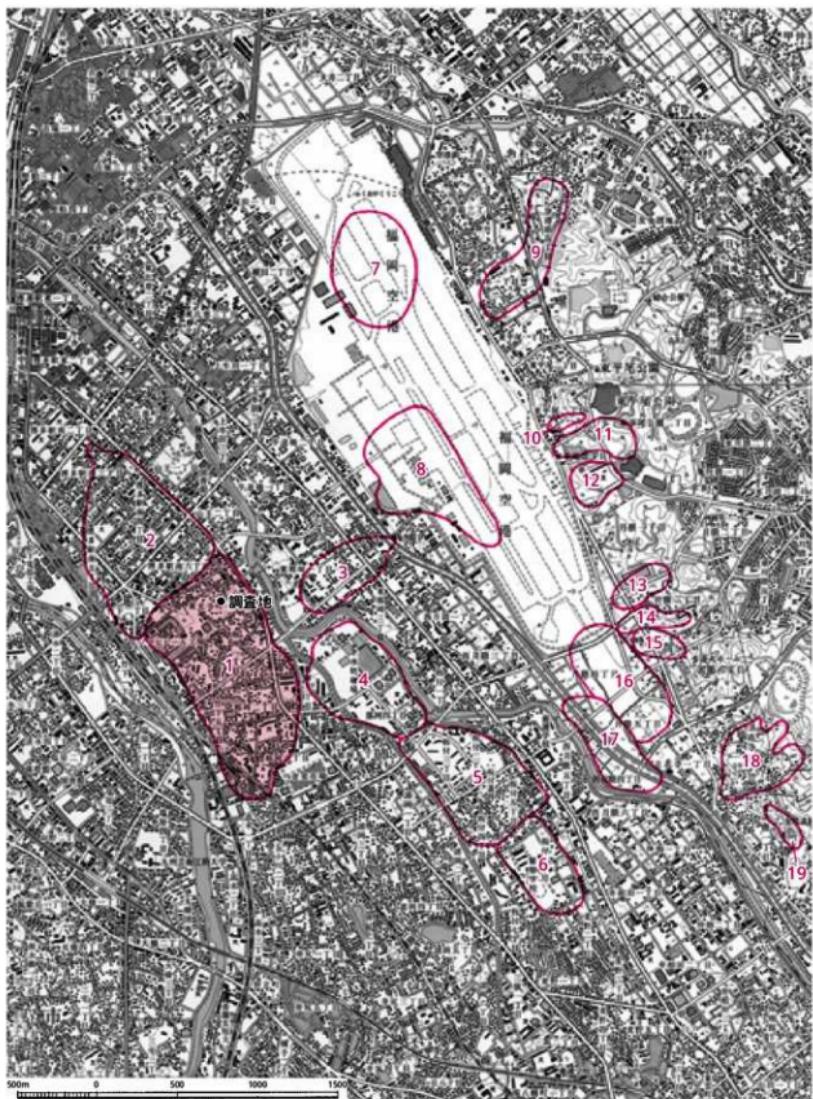


Fig. 2 調査地および既調査地位置図 (1/5,000)



1. 那珂遺跡 2. 比恵遺跡 3. 東那珂遺跡 4. 那珂君体遺跡 5. 板付遺跡
 6. 高畠遺跡 7. 上牟田遺跡 8. 雀居遺跡 9. 席田青木遺跡 10. 久保園遺跡
 11. 席田遺跡 12. 宝満尾遺跡 13. 天神森遺跡 14. 下月隈B遺跡 15. 上月隈遺跡
 16. 下月隈C遺跡 17. 立花寺B遺跡 18. 立花寺遺跡 19. 金隈遺跡

Fig. 3 調査地周辺遺跡分布図 (1/30,000)

第III章 調査の記録

1. 試掘調査の概要

申請地は東西8.75m、南北13.65mを測る南北方向に細長い長方形を呈し、周辺における標高は8mを測る。試掘調査は、トレーナーを申請地の中央に縦断するように設定し、平成10年5月19日に実施した。地表下0.56mで地山層を形成する鳥栖ロームとなり、同土層上面において遺構を検出した。遺構は暗茶褐色土を覆土とする溝2条と溝に切られている竪穴住居跡1基である。遺物は、溝から須恵器の楕片、住居跡から時期が不明の素焼きの土器片が出土した。

2. 調査の概要

発掘調査範囲は、試掘調査成果と開発計画とを検討の結果、攢乱を受けている申請地の南北両端部を除いた地域とした。調査は、排土置場の関係から調査区を南北の二区に分け北半部から着手した。平成10年6月8日(月)に表土をバックフォーで除去後、人力による遺構検出および掘り下げを行った。その結果、最も浅いところでは地表下0.42mで基盤層の鳥栖ローム層に達し、同層上面において竪穴住居跡、溝、小穴を検出して試掘調査の推定が正しかったことを検証することとなった。方形の平面形を呈する竪穴住居跡は西辺壁際が一段高くなる、いわゆるベットを有し、竪穴住居跡を横断するように2条の溝が壊している。同月17日(水)からは南半部の調査に着手し、北半部調査区で検出してきた竪穴住居跡の南辺部を検出するとともに溝2条や小穴なども検出したが、住居跡の全容解明には至らなかった。同月25日(木)に埋め戻しを完了して発掘調査を終えた。

資料整理および報告書の作成は、平成16年4月から開始して平成17年3月に終了した。



Fig. 4 調査地位置図 (1/500)

3. 遺構

調査地における土層は地表から表土である現代造成土（層厚30cm）、暗茶色粘質土（層厚10cm）、地山で赤褐色粘土を呈するいわゆる鳥栖ロームとなる。地山面は、調査地が南北方向に伸びる丘陵の東縁に位置することから東方へ向かって緩やかに傾斜している。

遺構検出は地表下40~60cmの地山面（暗赤褐色粘土）で行った結果、竪穴住居跡1基、溝4条、土坑、小穴などを検出した。遺構の年代は出土遺物などから古墳時代~飛鳥時代に推定される。

竪穴住居跡（SC）

SC10 (Fig 5 PL 5~7)

調査区中央部から東辺部に位置し、溝SD17・18・35によって遺構の一部が壊されている。平面形は、遺構の北部が現代攪乱によって消滅しており、さらに東部は調査区の外へ拡がっているために全形を確認するには至らなかったが、方形もしくは長方形を呈すると考えられる。建物規模は残存する遺構から、建物の主軸を東西方向とし、方6.5m以上の大型建物が推定される。住居跡の西壁際は幅1.0~1.1mが床面より20cmほど高くなっている。いわゆるベットと称される遺構である。ベットは高さ10cmほどの地山削り出し成形面上に厚さ10cmほどの粘土を均等に貼り付けているが、粘土貼り付けの時期については不明である。ベットの壁際には幅10cm・深さ8cm前後を測る溝が設けられており、同様で同規模な溝は住居跡南側壁際にも認められる。床面は平坦で、貼り床の可能性が残る。床の中央部からベットにかけて幅0.6m、長さ2.3m、深さ0.6mを測り、平面形が橢円形状を呈した細長い溝状遺構が認められ、竪穴住居の柱穴とその抜き取り穴と考えられる。この場合には二本柱型式の建物となる。住居跡の壁は床面から垂直に立ち上がる。住居跡建設の際には地面を少なくとも0.6m以上に掘削していることが南側の壁面残高から明らかである。竈・炉については調査区内においては認められなかつたことから、攪乱によって欠失した部分もしくは未調査区に設けられていたものと推定される。

住居跡覆土（灰褐色粘土質混じり暗茶褐色粘質土）内からは、弥生時代中期の櫛片、須恵器坏・蓋・甕、土師器甕・高坏・鉢、砥石などが出土している。

溝（SD）

SD17 (Fig 5 PL 5,6,8)

調査区の中央部に位置する直線的な東西溝で、同じ東西溝のSD18の北側を接するように並行している。幅0.5m、深さ0.1~0.4mを測る。溝の底面は曲面を呈し、壁も緩やかに弧を描きながら立ち上がる。溝の東部分は竪穴住居跡SC10と重なる位置関係にあり、SC10の覆土を切り込んでいる。また遺構の一部は溝SD18によって壊されていることから、溝SD18に先行することが明らかとなっている。溝内の覆土は黒茶色粘質土である。溝内からは土師器の甕片が出土している。

SD18 (Fig 5 PL 5,6,8)

調査区の中央部に位置する直線的な東西溝で、同じ東西溝のSD17の南側を接するように並行している。溝の東部分は竪穴住居跡SC10と重なる位置関係にあり、SC10やSD17の遺構の一部を壊している。幅0.8m、深さ0.5mを測るが、本来は幅1.0m、深さ0.6mが復元される。溝の底面は曲面を呈し、壁も緩やかに弧を描きながら立ち上がる。溝内の覆土は暗茶色粘質土である。溝内からは須恵器坏、土師器甕片が出土している。

SD34 (Fig 5 PL 5)

調査区の南西部に位置する溝で南西~北東方向に直線的に走行する。溝の西側は調査区の外にのび、東端部は調査区中央部で壁が立ち上がる。幅0.7~1m、深さ0.1~0.6mを測る。溝の底面は曲

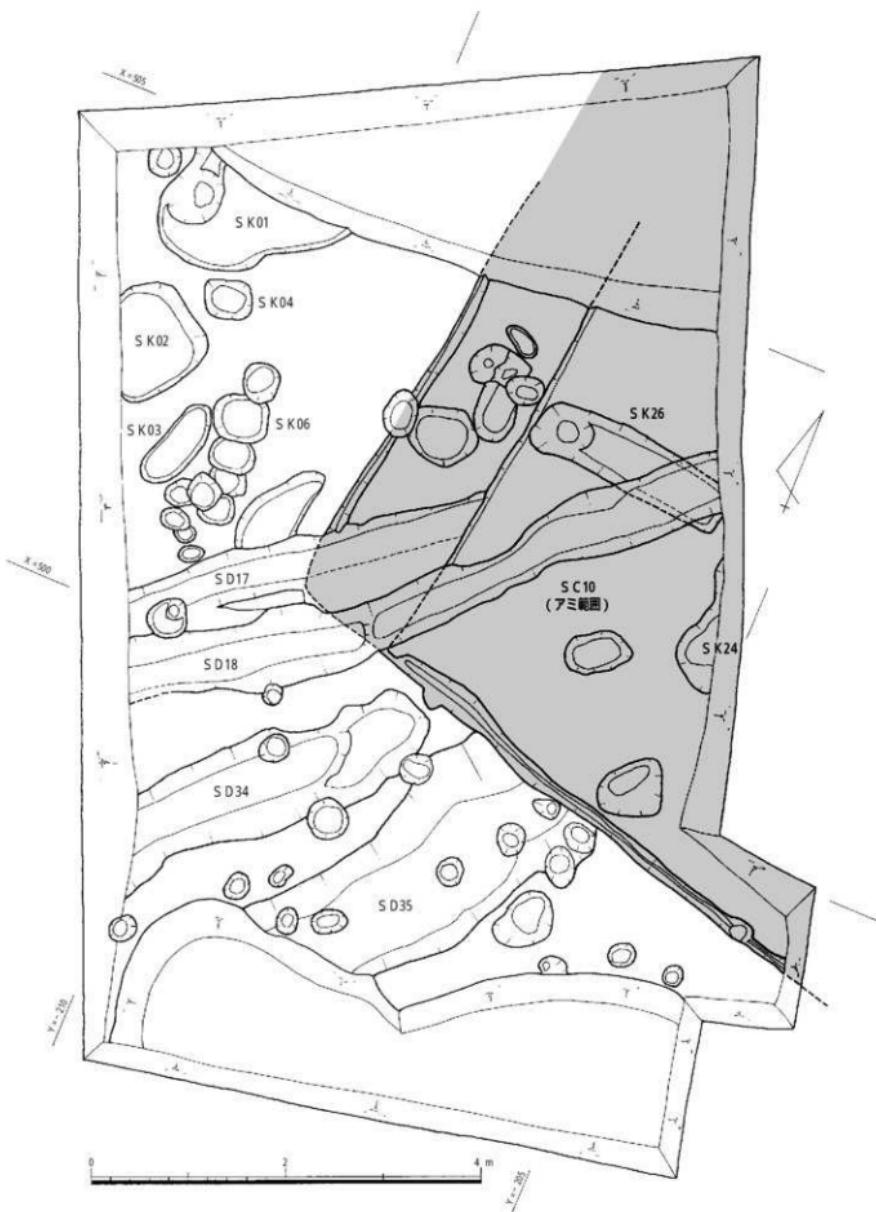


Fig. 5 遺構配置図 (1/50)

面を呈し、東端部近くは一段浅い。壁は緩やかに弧を描きながら立ち上がる。

溝内からは土師器の壺・甕片が出土している。

SD35 (Fig 5 PL 5)

調査区南半部に位置する溝で、南西-北東方向にやや蛇行しながら走行する。溝の西端部は現代攪乱によって欠失し、東端部は竪穴住居跡SC10の覆土を塗している。幅1.2~1.6m、深さ0.3mを測る。溝の底面は平坦で、壁面は緩やかに弧を描きながら立ち上がる。溝内の覆土は黒色土混りの暗茶褐色粘質土である。

溝内からは須恵器壺・蓋・高壺・横瓶・椀・甕、土師器甕・高壺・鉢が出土している。

土 坑 (SK)

SK01 (Fig 5 PL 5,6)

調査区の北西隅、竪穴住居跡SC10の西方2mに位置する。平面形は、北半部が現代攪乱を受けており全形は不明であるが、残存部から楕円形が復元される。底面は平坦であるが、西端部は楕円形状に一段深くなっている。深さは0.15mを測る。壁面は直線的に緩やかに開きながら立ち上がる。土坑内の覆土は茶褐色粘質土である。

SK02 (Fig 5 PL 5,6)

調査区の北西隅、土坑SK01の南1.5mに位置する。平面形は、遺構の一部は調査区の外へ拡がり全形は不明であるが、残存部から方1.1mの隅丸方形が復元される。底面は平坦で、壁面は直線的に傾斜しながら立ち上がる。深さは0.3mを測る。土坑内の覆土は黒色粘質土である。

SK03 (Fig 5 PL 5,6)

調査区の北西隅、土坑SK01の南に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸は東西方向に位置する。長辺0.5m、幅0.4m、深さ0.3mを測る。底面は平坦で、壁面は緩やかに弧を描きながら立ち上がる。溝内の覆土は黒色土混りの暗茶褐色粘質土である。

SK04 (Fig 5 PL 5,6)

調査区の西辺中央部、土坑SK02の南1mに位置する。平面形は細長い楕円形を呈し、長軸は南北方向に位置する。長さ1.0m、幅0.4m、深さ0.1mを測る。底面は平坦で、壁面は緩やかに弧を描きながら立ち上がる。土坑内の覆土は茶褐色粘質土である。

SK06 (Fig 5 PL 5,6)

調査区の西辺中央部、土坑SK03の東に位置する。平面形は方0.5mの隅丸方形を呈し、深さ0.4mを測る。底面は曲面で、壁面は緩やかに弧を描きながら立ち上がる。土坑内の覆土は茶褐色粘質土である。

SK24 (Fig 5 PL 5~8)

調査区の東辺中央部に位置し、大半が調査区の外に拡がる。

土坑内からは器台が出土している。

小 穴 (SP)

小穴からは、弥生土器甕、須恵器壺蓋・鉢・甕、土師器甕が出土している。

4. 遺物

豎穴住居跡 (SC)

SC10 (Fig 6 PL 9)

1は須恵器の坏身の完形品で、口径9.9cm、底径6.7cm、器高2.7cmを測る。体部・底部は浅く、底部は狭小である。受部は水平に外方向へのび、端部は丸く仕上げている。口縁部は、横ナデのつまみ上げで極めて短く上方に立ち上がる。底部調整はヘラ状工具による切り離しの他は行っていない。底部外面にはヘラ記号「×」が施されている。胎土は僅かに0.5~1mm程の長石、石英砂粒を含むが、精選した粘土である。色調は暗青灰色を呈し、焼き締まっている。2は須恵器の蓋で、口径14.2cm、器高3.5cmを測る。天井部は平坦でヘラ削り調整している。口縁部と天井部との境は丸味を呈し不明瞭である。端部は丸く仕上げている。胎土は僅かに0.5~1mm程の長石、石英砂粒を含むが、精選した粘土である。色調は淡青灰色を呈し、焼き締まっている。5は須恵器の高坏で坏部と脚端部を欠く。胎土は僅かに0.5~1mm程の長石、石英砂粒を含むが、精選した粘土である。色調は青灰色を呈し、焼き締まっている。7・9は土師器の台付き鉢と推定される。口縁は短く「く」の字状に外反し、端部は丸く仕上げている。頸部屈曲部の内面にはいずれも稜線を有し、胎土は1~3mmほどの長石、石英砂粒を多く含み黒色~暗茶灰色を呈する。6・8は土師器の甕で底部を欠く。胴部は卵形を呈し頸部は僅かに綿まる。口縁は頸部から僅かに外反しながら直線的に立ち上がる。胎土は1~2mmほどの長石、石英砂粒を多く含み茶褐色を呈する。6・8は同一個体の可能性が高い。

溝 (SD)

SD18 (Fig 7 PL 9)

10は須恵器の蓋で、口径15.2cm、器高4.2cmを測る。天井部は平坦でヘラ削り調整している。口縁部と天井部との境は丸味を呈し不明瞭である。端部は丸く仕上げている。胎土は僅かに0.5~1mm程の長石、石英砂粒を含むが、精選した粘土である。色調は淡橙白色を呈し、軟質である。

11は土師器の甕で底部を欠く。胴部は胴長で、頸部は僅かに綿まる。口縁は「く」の字状に外反し、端部は丸く仕上げている。頸部下の器面整形は内面がヘラ削り、外面は刷毛目である。胎土は2~5mmほどの長石、石英砂粒を多く含み橙灰色を呈する。

SD34 (Fig 8 PL .10)

12は台付き壺と推定され、壺部を欠く。脚部は脚尖部で外反し、端部は面を有する。胎土は2~5mmほどの長石、石英砂粒を多く含み橙灰色を呈する。

SD35 (Fig 9 PL .10)

16は須恵器の横瓶で、胴部は卵形を呈し上部に口縁が付く。21は須恵器の取手付き椀で口縁部の一部を欠くが、口径8.2~11.4cm、底径5.2cm、器高8.3cmを測る。狭小で平坦な底部から体部はやや外半しながら直線的に立ち上がる。底部近くにL字型の小さい取手がつく。口縁部外面には櫛目調整が施されている。底部はヘラ削り調整している。胎土は僅かに0.5~1mm程の長石、石英砂粒を含むが、精選した粘土である。色調は青灰色を呈し、焼き締まっている。

小穴・包含層 (Fig .10 PL .10)

19・20は須恵器の蓋である。天井部は平坦でヘラ削り調整している。口縁部と天井部との境は丸味を呈し不明瞭である。端部は丸く仕上げている。胎土は僅かに0.5~1mm程の長石、石英砂粒を含むが、精選した粘土である。色調は淡橙白色を呈し、軟質である。

18は小型土製品で、坏もしくは皿を模倣したものである。

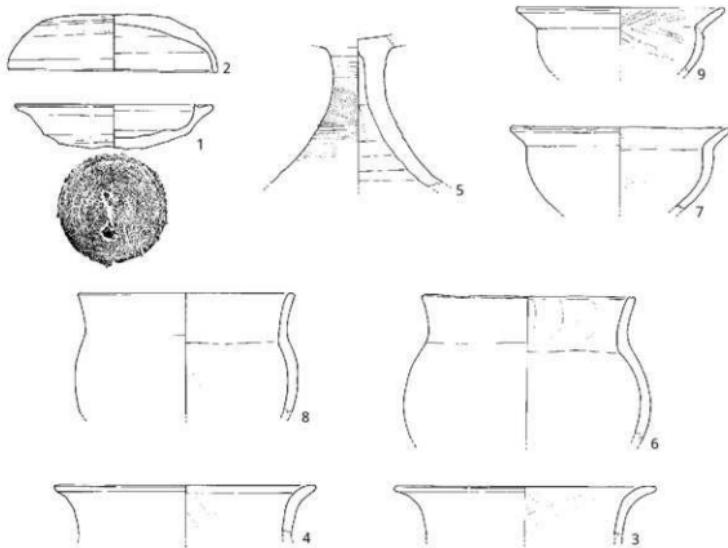


Fig. 6 豐穴住居跡 SC10出土土器実測図 (1/3)

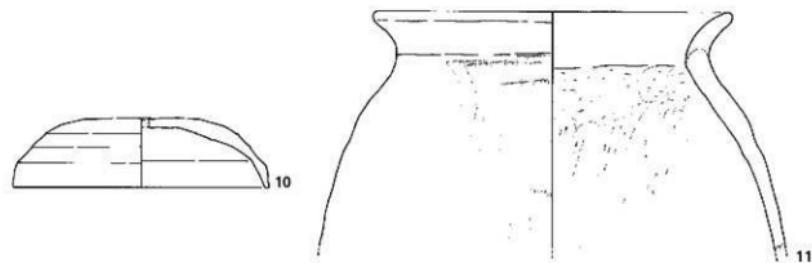


Fig. 7 溝 SD18出土土器実測図 (1/3)



Fig. 8 溝 SD34出土土器実測図 (1/3)

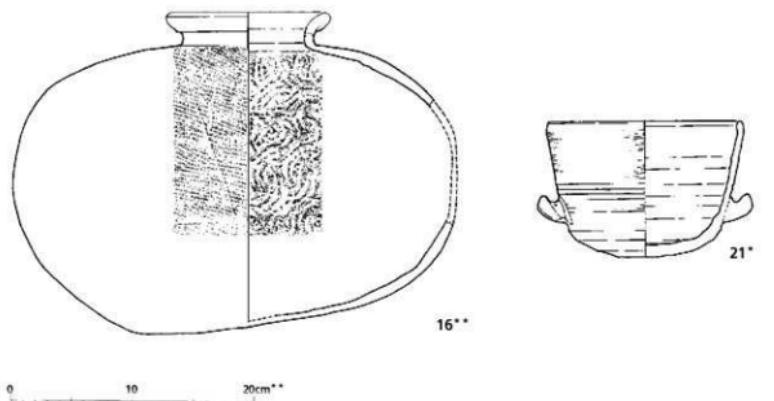


Fig. 9 溝SD35出土土器実測図 (1/3*・1/4**)

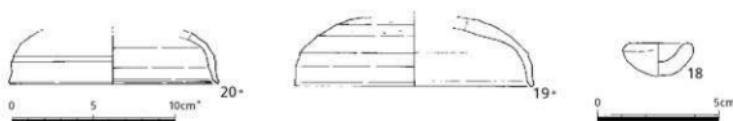


Fig. 10 小穴・包含層出土土器実測図 (1/2・1/3*)

図版

PLATES



調査風景



調査地周辺航空写真 1948年（昭和23年）撮影



調査地周辺航空写真 1975年（昭和50年）撮影



調査地周辺航空写真 1993年（平成5年）撮影



調査地周辺航空写真 2001年（平成13年）撮影



(1) 第 I 調査区全景 (北から)



(2) 第 II 調査区全景 (北から)



(1) 第 I 調査区竪穴住居跡 SC10全景 (北から)



(2) 第 I 調査区竪穴住居跡 SC10全景 (東から)



(1) 第Ⅱ調査区竪穴住居跡 SC10全景 (北西から)



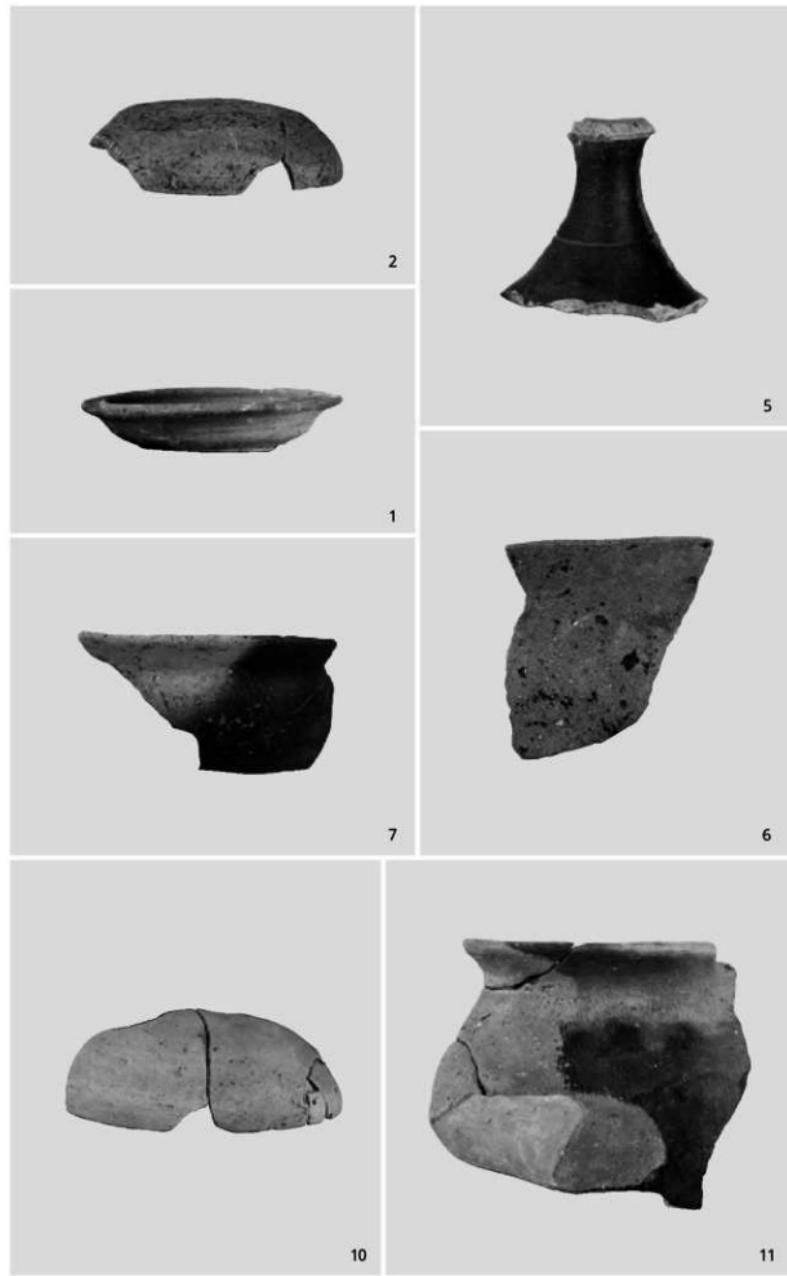
(2) 第Ⅱ調査区竪穴住居跡 SC10南壁溝 (北西から)



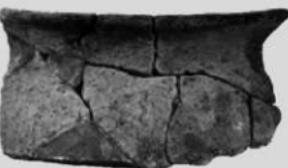
(1) 第 I 調査区溝 SD17・18 (南東から)



(2) 第 I 調査区溝 SD17・18 (北西から)



豎穴住居跡・溝出土遺物



13



12



21



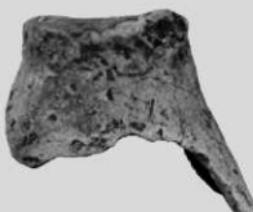
15



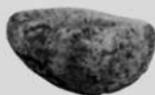
—



16



17



18

第IV章 小 結

これまでに那珂遺跡群の位置する丘陵部においては多くの発掘調査が行われ、丘陵の歴史的変遷が明らかになりつつある。確かに弥生時代をはじめ、古墳時代～飛鳥時代においても個々の調査における遺構・遺物の濃度や特殊性は周辺地域における遺跡と比べて突出しているが、それらを創生・形成する基盤層の遺構については明らかになっていない。

今回の調査においても調査範囲の限定などから古墳時代末における遺跡の旧地形の一部を明らかにするとどった。このため、本章では調査成果と課題とを述べ、今後につづく発掘調査の検討資料としたい。

1. 遺構の年代と性格について

今回の調査で検出した竪穴住居跡、土坑、溝、小穴などの遺構は、出土遺物から6世紀中期～末頃が推定される。竪穴住居跡は全容を明らかにすることはできなかったが、残存部から方8～10mが推定される。この建物規模は同時期の一般的な建物と比較しても大きいといえよう。竪穴建物跡は住居内に生活遺物を残していないことから、転居などによる廃棄の結果と考えるのが自然であろう。この住居跡を含む集落の構成などについては不明である。

溝の多くは自然地形に合致した西から東方向へ流れを示しており、開削年代も遺構の斬り合い関係から竪穴住居跡廃絶後より多くの時間を経ていないと考えられる。溝底には滞水を示すような細砂などの堆積は認められないことから、本調査地の西側に想定される施設の排水もしくは区画を目的とするものと考えられる。

2. 遺跡の地形復元

那珂遺跡や比恵遺跡の立地する丘陵は西側を那珂川、東側を御笠川に画され、北側は海が深く入り込んでいる。地形も単純な単丘陵ではなく、谷部が複雑に入り込んだ複合的丘陵であったことが明らかになりつつあり、遺構は島状を成す丘陵平坦部に分散せざるを得ない状況下に置かれていたと考えられる。このため、弥生時代などにおけるムラは地理的制約による小規模な環濠集落の複合体で構成されていたのではないかと考えられ、以降の時代の遺構においても同様であったと考えられる。

3. 今後の問題点

那珂遺跡群の立地する那珂・比恵丘陵には各時代の遺構が重層的に存在しているが、緊急調査の宿命故の部分調査に制限され、遺跡群の解明には永い時間が必要としている。

古代においても7世紀前半期の瓦類が出土しているものの、直接的遺構の検出には至っていない。しかし、今後の展開を考えると本調査地南から南西に位置する空地部分に解明の手がかりが求められよう。

報告書抄録

書名ふりがな	なか		
書名	那珂37		
副書名	那珂遺跡群第66次調査報告		
巻次			
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書		
シリーズ番号	841		
編著者名	灌本正志		
著者名	灌本正志		
編集機関	福岡市教育委員会（埋蔵文化財課）		
発行機関	福岡市教育委員会		
機関所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号		
発行年月日	20050331		
遺跡名ふりがな	なかいせきぐん		
遺跡名	那珂遺跡群	北緯（日本測地系）	333402
所在地ふりがな	ふくおかげんふくおかしかたくとうこうじまち	東経（日本測地系）	1302747
遺跡所在地	福岡県福岡市博多区東光寺町一丁目17-1	北緯（世界測地系）	333413
市町村コード	40132	東経（世界測地系）	1302738
遺跡番号	0085	調査期間	19980608～19980625
調査原因	個人専用住宅建設	調査面積	80m ²
種別	集落		
主な時代	古墳時代（6世紀中期～末）		
主な遺構	竪穴住居1・溝4・土坑8・小穴		
主な遺物	土師器・須恵器		
特記事項			

那珂37

-那珂遺跡群第66次調査報告-

福岡市埋蔵文化財調査報告書

【第841集】

編集・発行 福岡市教育委員会
 福岡市中央区天神1丁目8-1
 平成17年3月31日
 092(711)4667
 印刷 佐伯印刷株式会社
 福岡市南区大楠3-27-1-402

NAKA SITE

THE REPORT OF THE 66TH ARCHAEOLOGICAL EXCAVATIONS
OF THE NAKA SITE
IN FUKUOKA, JAPAN

March 2005

THE BOARD OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY